

■勉強会報告(JCAT・JCAK共催企画)

ICF 荒木まさえ さんをお迎えして、
【英語を意識してクライアントの変化を加速する！
ー英語でのコーチングを日本語で疑似体験ー】
勉強会を実施いたしました。
<http://kokucheese.com/event/index/193743/>

まず自己紹介で挨拶し合うことから始まった機会。
まずは日本語で、そして次は英語での挨拶を実施してみたのアイスブレイク
だったのですが、後方で見ている面白かったのは、
英語になった途端、声が大きくなり、皆さんゼスチャーが大きくなって
場が一層華やかになったことです。

荒木さんは海外でのご自分の経験や、そこで出会い、学んだコーチングを
今に活かしておられ、日本語と英語の両方でコーチングをされています。
英語を取り入れたコーチングが何故いいか、ということシェアいただき、
また、それは言語の使い方や文化の違いからであることが解ってきます。

英語は結論を先に言い、理由を後で加えます。
確かに私自身も英語に慣れている人から、よく「結論を先に言え」と
言われたことを思い出します。

日本人は言葉の使い回しや高コンテキストな文化からも手伝い、
長々と言い訳を先に言い、ぐるぐると巡ってしまうクライアントがいます。
その時にどうするのか？というところに、また、最終的に結論を出したい時
にとっても有効な気がしました。

クライアントのルール

- ・‘I(私は・が)’から始まる言葉で答える
- ・意志・断定で答える
- ・理由を短く明確に答える

これをコーチングセッションで実際にやってみたのですが、
いかに日頃曖昧に話している自分があるか、ということに気が付きます。
敢えてそこを断定的に話してみることによって、自身の言葉に違和感を
感じたり、‘I’ではじめることによって自身の言葉に責任を持つ意識が
芽生えることもとても面白い体験となりました。

もう一つ気が付くのは、これを聞くコーチも「聞くことを明確にする」意識
が必要だなと気づくことでした。

言葉には、その向こうにある考え方や習慣・文化も表れます。
どんな時に英語(的)コーチングを使うか、も大事だとのことでしたが
新しい視点をいただき、とても興味深い時間でした。
荒木さん、ありがとうございました。
そして、ご一緒させていただきました皆さま、とても豊かな学びの時間を
ありがとうございました！

(報告: JCAT 河野@Michiru)